

神の意志としての天変地異

[中沢新一の著書「チベットの先生」（平成27年2月、角川ソフィア文庫）](#) というのがある。これは、中沢新一が実体験にもとづき、チベット仏教のある修行者（中沢新一は「チベットの先生」とか「ケツン先生」と呼んでいる。）から聞いた、ジェラマ・ゴンボ・リンポチェと（中沢新一は「ゴンボ先生」と呼んでいる。リンポチェはチベット仏道の修行者に与えられる尊称である。）という非常にすぐれた行者の話を書いたもので、まことに不思議な話が紹介されている。それを紹介しよう。

『 ゴンボ先生とともに、1943年の秋、私（ケツン先生）たちは大きな巡礼の旅に出発した。』

『 その年の10月21日のことである。チェロカ地方に向かった私（ケツン先生）たちの一行は、ウーカルタクという土地に着いた。ここはその昔、グル・リンポチェの妃であったイエシエ・ツォギャルが深い瞑想の中で、虹の身体をあらわしたという、まことに神聖な土地だった。私たちが石ころだらけの山道を登って、その聖地にたどり着いたとき、空の雲がびっくりするほどにまばゆい、虹のような色彩を発光したのだ。雲はゆっくりと変化しながら、さまざまな不思議な形をあらわした。私たちはみんな、「ほお！！」と賞賛の声をあげた。ゴンボ先生も目を細めて、この光景を見入っておられた。「見てごらん。あの雲、まるで捧げものを持った天女みたいじゃないか」仲間の若い修行者の一人が叫んだ。見るとたしかに、美しい衣を風になびかせた天女、手に捧げものを入れた器をうやうやしく捧げ持って、天空を見上げている姿が、オレンジ色に染まった雲の中からあらわれてくるようなのだ。その雲がゆっくり空を流れていく様子は、本当にうっとりするほど美しかった。輪郭もくっきりと浮かび上がった、向こうの山の頂きには、壮麗な虹の色を映した薄い雲が、長々と天空に向かってたちのぼりときおりそこから閃光が放たれている。あたり一面の大気が、このとき不思議な香りを放ちだしたのには、みんなまたびっくりした。誰もが、今まで体験したこともなかったような、心地よい快感にうっとりしていた。誰かが「きれいな音楽が聞こえてこないか」と言いだした。私たちは、耳をすませた。す

ると不思議なことに、お寺で聞くはずの笛や太鼓やドラの音そっくりの音が、空の上から降ってくるように、たしかに感じられるのだ。私たちが驚き騒いでいると、その内にこの瞑想場にこもって修行している人たちまでもが、小屋の扉を開けて、外に出てきた。その人たちも、この光景には度肝を抜かれたようだった。「空に壮大なマンダラがあらわれた」とか、口々に驚きを語り合っている。ウーカルタクの修行者たちも、ゴンボ先生のお供でやってきた者たちも、このような脅威の現象を目のあたりにして、いつまでも空を見上げて、口々に驚嘆を語りあった。そして、この現象は、太陽が完全に沈んでしまうまで、何時間も続いたのである。』

『ところが、そんなことがあった四日後の10月25日の朝のことである。すでに山の端から昇った太陽が、さんさんと陽光を大地に降り注いでいるのに、同じ空からは雨が降りかかり、その異様な天候のさなか、大地震が大地をゆらゆらと揺さぶりはじめたのだ。空には不気味な音響がとどろきわたり、大地から閃光がほとぼしり出た。地震は長い間続いた。そして、大地の揺れがおさまったのちも、不気味なとどろきと閃光の瞬（またた）きは、やまなかった。私たち弟子は、この天変地異を体験して、すっかり恐ろしくなり、落ち着きを失って、みな大急ぎでゴンボ先生のいらっしゃる瞑想小屋の前に集まってきた。』

『皆は口々に「先生、これは一体どうしたことなのでしょうか」と質問した。するとゴンボ先生は落ちついた様子で、こうおっしゃった。『心と存在の本性を見通してしまったラマが亡くなろうとしているときには、前兆としてよくこういう不思議な現象がおこるものなのだ。それが、私にいま起ころうとしている。』・・・と。

そして、ゴンボ先生は、そののちに大事な弟子のために最後の教えをし教え終わってから、亡くなるのだが、その際にも誠に不思議な現象が起こったのだが、この点については省略する。興味のある方は中沢新一の著書「チベットの先生」（平成27年2月、角川ソフィア文庫）を読んでもらいたい。神から選ばれた人が亡くなる時には、天変地異が起こるのだということが、私のいちばん言いたいことである。その天変地異は神の意志の現れであり、神は、大事な弟子のために最後の教えをし教え終わるまで死んではならぬというこ

とを意思表示なさるのであろう。ゴンボ先生はその神の意志のまま生き、そして死んでいかれた。

中沢新一の「チベットの先生」の話は以上であるが、神から選ばれた人が亡くなるときには、天変地異が起こるのだということが、私のいちばん言いたいことである。その天変地異は神の意志の現れであり、神は、大事な弟子のために最後の教えをし教え終わるまで死んではならぬということを意思表示なさるのであろう。ゴンボ先生はその神の意志のまま生き、そして死んでいかれた。同じことが日蓮にも起こっている。

弘長3年(1263)、伊豆流罪を解かれて鎌倉に戻った日蓮上人は、布教活動を再開しました。幕府に再び立正安国論を差し出し、蒙古来襲を警告しました。文永8年(1271)、再び幕府は日蓮上人を捕らえ、[龍の口](#)刑場で処刑する事になりました。しかし処刑寸前に、天にわかにかき曇り稲光が起こり、処刑を免れ、佐渡へ配流されました。

日蓮は、なぜ処刑されそうになったのか？ それを少し書いておきたい。日蓮は神に選ばれた人であるからだ。神から選ばれた人というのは、世界の歴史上、キリストと釈迦とマホメット、それにジェラマ・ゴンボ・リンポチェや日蓮など、それほど多くはない。

日蓮は、1260年（文応元年）、立正安国論を著わし、前執権で幕府最高実力者の第5代執権北条時頼に送る。安国論建白の40日後、他宗の僧ら数千人により松葉ヶ谷の草庵が焼き討ちされるも難を逃れる。その後、ふたたび布教をおこなう。

1261年（弘長元年）、幕府によって伊豆国伊東（現在の静岡県伊東市）へ配流（伊豆法難）。

1271年（文永8年）7月、極楽寺良観（忍性ともいう）の祈雨対決の敗北を指摘。9月、良観や念阿弥陀仏信者らが連名で幕府に日蓮を訴える。そして、幕府や諸宗を批判したとして佐渡流罪の名目で捕らえられ、腰越龍ノ口刑場（現在の神奈川県藤沢市片瀬、龍口寺）にて処刑されかけるが、処刑を免れるのである。

このように日蓮は危なく処刑されかかるのであるが、そのことに関連して、鎌倉時代の刑罰について少し述べておきたい。頼朝の時代から北条の時代になって、第3代執権・北条泰時の時かの有名な「御成敗式目」が作られる。刑罰の詳細を定めたものであるが、それには処刑という刑罰はない。にも関わらず、何故、日蓮は処刑を言い渡されたのか？

北条重時は、第5代執権・北条時頼を補佐する幕府の実力者であるが、良観や念阿弥陀仏信者らと深く結びついていた。そしてやがて、北条重時の子供である北条長時が第6代執権になるのだが、第6代執権・北条長時は、日蓮の「悪口」に手を焼き、遂に、日蓮の処刑に踏み切ったようだ。「悪口の咎」に死罪はないが、「悪口の咎」が度重なる場合、御成敗式目に規定はないので、幕府の判断で死罪を申し渡すこともあり得たのであろう。このような背景のもとに日蓮は処刑を言い渡された。

そして、滝の口の処刑場で、日蓮が首切りの座に据えられた時、にわかには雷鳴が轟き、刑吏が振り上げて刀を感電して折れてしまった。処刑は不首尾に終わった。そこへ北条時宗の使者がきて処刑は中止、佐渡への流罪になった。



(<https://blogs.yahoo.co.jp/to7002/34963781.html> による)